

常なる磐

つねなる いわ

令和2年12月18日(金)

◇ 受け継ぐ という事 受け渡す という事

長放課も昼放課も、赤白帽をかぶった児童がグラウンドを駆け回っている。
今、子供たちの中では、「鬼ごっこ」がブームなのだ。元気いっぱいな姿で走り回る子供の姿は実にいいもので、見ていて元気が湧いてくる。
本校のよいところは、遊びが学年を超えて一緒にできること。低学年ばかりが鬼にならないように、ルールらしきものがあるのも素敵である。

最近では、登校後の始業前の自由時間も鬼ごっこ。いち早くブランコに向かう姿は、今はもうない。どうやら、1年生の一輪車ブームも過ぎ去ったようだ。
記憶をたどると、鬼ごっこが始まったのは「駆け足訓練」が始まった頃と時を同じくする。訓練中は、駆け足が終わった直後。もしかすると訓練よりもハードな連続の鬼ごっこである。すごい。子供のエネルギーは、本当に底知れない。

よく見ると、グラウンドに姿があるのは1年生から4年生の子供たち。5・6年生の上級生の姿はない。おにいさん、おねえさん世代は鬼ごっこに興味がない？ いや、そうではない。遊びに加われば、下級生の面倒をよくみて、より楽しさが増すような配慮ができるのが本校の5・6年生である。

キャッキヤ、キャッキヤと甲高い声をグラウンドに響かせるのが1年生から4年生。5年生と6年生は、2階のオープンスペースで楽器を奏で、心休まる音楽を校内に響かせる。今は校歌の演奏。数度しか耳にしていない校歌ではあるが、5・6年生の演奏のおかげで、もうすっかり耳になじみ、音程を把握できた。

記念式典以降、昼放課は校歌演奏の練習がずっと続いている。大したものだ。
褒め、讃えることができる部分は、継続して行っていることほかにある。それは、練習に取り組む5・6年生の姿勢。まさに、姿から真剣味が伝わってくる。
寄り添い、手取り足取り、自分が備えた技を伝授する6年生。そのエネルギーを真正面から受け止め、自分のものにしようと努める5年生。真剣勝負である。

6年生のエネルギーは、自分が演奏に注ぎ込んできたエネルギーだけではない。
今、中学校に通う中1の先輩から授けてもらったエネルギーが加わっている。
教えてもらったことを教えていく。伝えてもらったことを伝えていく。本校が長い年月をかけて醸成してきた伝統がそこにあるのだ。

5年生に伝わり、5年生が受け止めることができるのには理由がある。
1年に及ぶ合同練習を通し、6年生が鼓笛演奏にかけてきた情熱の熱量を感じ、知っているからである。
受け継がれてきたものを「受け継ぐ」責任がそうさせるのだ。これも伝統だ。だから、教員は付きっきりでなくてよい。見守ればよい。なぜなら、そこに子供たちの【自主】が存在するからである。

タイトルには、敢えて「引き渡す」ではなく、【受け渡す】と書いた。
「引き渡す」というのは、自分の手元にあるものを、ただ相手に「渡す」行為。
「受け渡す」のと、全く意味を異にする。
「受け渡す」とは、相手に「渡す」だけでなく、相手からも何かを「受け取る」ことを意味する。

6年生は技を伝え、思いを託すだけでなく、5年生からもらっているものがあることを忘れてはいけない。
6年生の思いに応える【5年生の思い】である。

5年生に渡しているようで、実は5年生からいただいている。
その時はよく分からないが、あとになってよく分かる。でも、それでいい。

授ける(さずける)という字に【受(ける)】があるのは、そういうことだと思う。

授業は「業を授ける」と書く。
授業を通し、『子供から力を受けていることを我々は忘れてはならない』と戒めた。